
憤悶のアリアドネ

暮矢終之丞

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

憤悶のアリアドネ

【Nコード】

N4624D

【作者名】

暮矢終之丞

【あらすじ】

「羽間さん！私を殺して」 狂気のデモ集団の魔の手から助け出した美少女神谷美咲に、執拗に殺人を強要される羽間正太郎。『不鍵合症』^{ふけんごうしょう}という、いかなる薬物も効果を無くしてしまう伝染病は、この人類全体の子孫繁栄をも阻むのか。怒涛の如く巻き起こる凶悪な社会現象の中で、数々繰り返される残忍な殺人事件。その裏に隠された真実を求め、孤独な殺人者“羽間正太郎”が今立ち上がる。さて、人類が直面するその業とは？ この物語は、サスペンスタッチで描くSFエンターテイメントです。

プロローグ：悪意の具現（前書き）

現代のお話ですが、はっきりとした年号の設定はしません。SFというジャンルですが、はっきり言って微妙です。それと、更新はかなり不定期です。ゆっくり書いてゆきます。

プロローグ：悪意の具現

プロローグ 悪意の具現

十二月二十三日。

宵の口の十九時を過ぎると、身を突き刺すほどの凍て付いた風が、豪勢な住宅地の谷間を矢のように突き抜けてきた。港町のガス灯をモチーフにした街路灯は悲鳴のような高音を奏で、家路に着く者達を各々（おのおの）の皆へと追い立てていた。

この辺りは、海側の都市部から割とマイナーな鉄道路線で繋がれている。そのせいか、知名度にかなり地味な駅名が連なっている。狭い道路幅。無理に鉄道路線を敷いた為に起きる、開かずの踏み切り。一般的には「一方通行か」「迷路か」と見間違えてしまうほどの情景がそこにある。

それを除けば、閑静で住み易い場所だった。コロコロとリンゴが転げ落ちるように、急勾配の激しい傾斜角がスキー場のゲレンデにも似た坂道を形成する。その上の方から重い物カゴをぶら下げた婦人達が、慣れた調子で自転車のブレーキをキイキイ鳴らし下ってくる。

時には車も行き来するが、こんな狭い道なので、めったにお目にかかる事はない。子供たちも「ケンケンパ」と言いながら“案山子遊び”をしたり、縄跳びをしたり。中には地べたに座り込んで、ちびたチョークでお絵かきを楽しんでいる女の子も見受けられる。

軒を連ね、道幅いっぱい商品をしり出して売る八百屋や魚屋の威勢のよさに、道を通る誰もが振り向いて品定めをする。時には、昔懐かしい紙芝居の青年が大荷物を載せた自転車で、大仰に挨拶を

しつと通り過ぎる。

そんな所々に存在を誇示しているせせこましい商店街も、すぐに渋滞してしまう交差点も、住めば都。それぞれが住人達の心の中により良いスパイスとなつて紡がれている。

片桐須美の自宅は、そんな地域の外れにある高台の高級分譲地に存在した。

その場所は背の高い木々に囲まれ、近くにはさる学園の校舎が建ち並び、東京の高級住宅街と横浜の港町の空気が一遍に味わう事のできる、風光明媚な住宅地として知られていた。

父の片桐道夫は、三十年前に小さな広告代理店を立ち上げて、コツコツと基盤を築き上げてきた。その甲斐あつてか、今や会社は首都圏に五支店を構えるほどの成長を遂げていた。

鉄筋二階建ての6LDKは父道夫の自慢だった。リビングには薪を使った煉瓦造りの暖炉。山奥の民宿を思わせる囲炉裏端。キッチンとリビングの間には、趣味としか言いようがないミニチュアカウンターバーが存在する。

父、母、妹と、家族のそれぞれが八畳間クラスの自室を持っている。一階の広間から外へ抜けると、芝の手入れの行き届いた広い庭も存在する。そしてその一角には、須美の十二才の誕生日に仔犬として連れて来られたゴールデンレトリバーの“雷蔵くん”が待ち構えている。

須美は高校二年生である。学園生活も良好で、既に三学期にはイギリスへの短期間留学が決定している。

その、明るくて屈託のない笑顔は学園内でも陰ることはなく、二年生でありながら、同級生下級生はおろか、諸先輩方からも羨望の眼差しが注がれているほどであった。

彼女にとってこの十七年間は、まるで燦燦と照りつける太陽の日差しのようなもの。永遠に陰ることを知らない恒久的なもの。天の恵み。選ばれた者にしか与えられない僥倖うしろさと思えた。

そう、あの忌々（いまいま）しい事件が起きるまでは

絶対領域。家族の聖域。いや、彼女の心の最後の領域。それが打ち砕かれた時、すべての永遠が崩れ落ちた。それは、目の前の赤々とした暖炉の薪の燃えかすよりも儂^{はかな}くて脆^{もろ}いものだった。

一体誰がこんな事を。一体誰が何の恨みがあつてこんな事を

何べん悔いようともその事実から逃れる事は出来なかった。ただそれだけ。たつた一度の事実があつただけ。たつたそれだけですべてが狂い出した。

その事件がもとで家族全員が一步も外へ出られなくなった。足音に怯え、時に聞こえる怒号に耳を塞^{ふさ}ぎ、窓枠から投げ付けられる石つぶてから身を守るようにして過^ひごさねばならなかった。

今まであれだけ恩恵をくれた父、母、そして可愛い妹にさえ迷惑をかけてしまった。

だけどそれはあたしが犯した過ちなんかじゃない、あたしが望んだものなんかじゃない

須美は世界中の悪意に犯され続けていた。

少し足を延ばせば、東京との県境を示す一級河川がゆつたりと流れ、都会のよどんだ空気をも清々しいものに変えていた。

彼女は、小学校に上がるか上がらないかの頃に自転車に乗れるようになった。その前は“ミカちゃん”というキャラクターのロゴとイラストの入った補助輪付きの自転車^が宝物だった。

が、母方の祖母にあたる群馬のおばあちゃんが、入学祝いと称して気の早いプレゼントを贈ってきた。そのせいで、それから毎週のように父と河原の特訓をするハメになった。なんとプレゼントは、子供用の高級マウンテンバイクだったのだ。

しかし、彼女はありがた迷惑だなどと一度も思わなかった。もうすぐ生まれてくる新しい家族にもお姉ちゃんとして格好の良い所を見せたかったし、八月に上京を約束しているおばあちゃんにも、元気に格好良く乗りこなしているところを見せてやりたかったからだ。

父は、彼女をつやつやした髪を、弧を描くようになでながら言った。「ママは毎日病院で、須美の妹を産むために一生懸命頑張っているんだぞ。須美は一体何が出来る？」

須美は襟元で二つ手に束ねたおさげ髪をゆらゆらとはずませて、意気揚々と答えた。「逆上がりができるようになる。自転車にも一人で乗れるようになる」

「お手伝いの方は？」

「うん、もちろんお手伝いもするよ。お勉強もする。お洋服も自分でたたく枕もとにおいて寝る。だから」

「だから？」

「早くママに帰ってきて欲しい。ママに帰ってきて欲しい」
彼女はそう言いながら、父の太い腕に寄りすがりピョンピョン飛び跳ねた。父は複雑な笑みを投げかけて、より一層須美の頭をなで回した。

須美の母は、生まれつき体が弱かった。その分、妊娠五ヶ月を過ぎる頃になると、入退院を繰り返す生活が続いていた。

父は何かと不憫ふひんに思い、若くて頼りがいのある家政婦を雇っていたが、須美の心を満足させるまでには至らなかった。その満たされない思いが、幼い須美の芯の強さを育てていった。その気持ちだけが彼女の意欲を掻き立てていた。

いきなり補助輪なしのマウンテンバイクは恐怖に値した。乗り心地は“ミカちゃん”の時とは雲泥の差だった。不安が体中を取り巻いて、足の裏から冷たい何かが入り込んで来た。不安を感じて、右にも左にもすかすかとした風が舞い、須美の寂しく縮みきった心の中をあざけり笑っているかのように感じた。

それでも彼女は、転んでも転んでも起き上がった。葉っぱの苦い味と涙のしょっぱい味が、起き上がるたびに訪れた。やがて膝小僧がすりむけて血が滲にじみ出した時、涙が勝手に流れ落ちてきて止まらなくなつた。そんな時は、父が一生懸命駆け寄ってきてハンカチで膝小僧を押さえてくれた。

「もう少しだ。大丈夫。須美になら必ず乗れる」

ようやく父の手が離れ、補助なしでバランスを保てた時、今までの痛みより、寂しさなんかより、頬で風を切る爽快感のほうが上がっていた。父は、遙か遠くの後ろの方で何やら意味不明の大声を上げていた。が、須美には何を言っているのかさっぱり分からなかった。けれど、手を大袈裟に叩き、ターザンのように体いっぱい雄叫びを上げて喜びを目一杯表現していることは、河原にいる誰もが理解できた。

彼女はよろよろとよろめきながら、雲の上にも上ってゆくような気持ちだった。

これでママに会える。ママが帰ってくる。可愛い妹を連れながら。これでまた、パパとママと、私と一緒に暮らせる。そして新しい家族も一緒になって

根拠はどこにもないけれど、それが彼女の願いだった。そうすることですらなると信じていた。まだあどけない、幼児としての理屈も邪念も何もない、強い信念のような願いだっただのだ。

だから印象に残っていたのかもしれない。だから深い記憶の底に残っていたのかもしれない。こんな状況に陥るまで。今生の別れを惜しむ間もない、最後の最後の瞬間まで

それが、彼女のこの世に生きている上での、跳ね返ってきた記憶の断片だった。次の瞬間、氷のように硬く冷え切った刃が首筋の辺りを通り過ぎた。片桐須美は、どす黒い恐怖に怯えながら、悲鳴を上げることさえ許されなかった。十七年間生きてきて、二番目に不幸で、二番目に恐怖した瞬間だった。

彼女は、誰にも言いわけを述べる間もなく、絶望の悲しみに暮れたまま、一瞬にして絶命するしかなかったのだ。

憤悶のアリアドネ

悪意の具現
了

プロローグ：悪意の具現（後書き）

Q、風呂から上がると、君は砂漠を歩いていた。
すると、足もとに小さな長嶋監督が涙を流しながら産卵の真っ最中
だ。

長嶋監督は嬉しそうに、

「赤福の中身は異常プリオンか？」と、聞いてくる。
さあ、君はなんと答える？

A、「話せばわかる」

1 魅惑の女子高生（前書き）

この部分は、以前こちらに載せていた『アカシック！』の一部を改稿して引用しています。

実をいうと、そんな物語なんです。

1 魅惑の女子高生

1

クーラーが文明最大の利器と豪語していた頃が、とても信じられない季節になっていた。上空から舞い降りるビル風が、骨身に沁みるほど痛烈に感じられた。

墨色に煙草の灰を散りばめたような空。東京の厚化粧に、大ミミズを這い蹲つくらせたかの如くのさばる首都高速道路。その間を、冷えて固まった豆腐のような建物が雑草のように逞そむえ立っている。さすがに夜半過ぎともなれば、明日の日本を担う大量の荷物を背負った大型車どもが、あれやこれやと高速道路の路面を削りにやって来る。

サラ金に追われ、夜逃げ同然で西へ向かう者。

未来の夢を託されて製造された、硬くて冷たい鉄骨の山。

未だ国も生い立ちも名前もはつきりしない、明後日の晩御飯。

一台一台の車両たちが、それぞれの目的を果たさんが為に、猛スピードでタイヤを鳴らしつつける。

そんな中、一台だけ仲間はずれな格好をした、小さく鋭い光があった。その光は、周りより一段と低い位置にフロントガラスを有し、頭上は金属ではなく黒褐色のくたびれた合成シートの屋根で覆われている。

おまけに独特の流線型は、ゲコゲコ夏の田園に盛んなウシガエルを思わせる愛らしい風貌があり、いまだき流行らないリトラクテイブヘッドライトが、またそれをひと際愛らしい生き物のように思わせてくれる。しかも、ところどころ剥げかかった紅しょうが色の塗装が、なんともクラシカルではないクラシックカーを演出している。その紅しょうが色のウシガエルくんが、大ミミズのうねりを思わす首都高速の上を右往左往するたびに、無差別級レスラーのような

トレーラーどもの横をすり抜けてゆくのである。無論、あまり自由の利かないレスラー共は気が気ではない。しかし、丁寧にハザードでお辞儀をされるものだから、とうのレスラー共も何食わぬ態度でそれを見送っていた。

紅しようが色のウシガエルは、外回り環状線を東から西へと抜け、汐留を過ぎると左車線 横羽線 へと合流した。夜もとつぷり更けた丑三つ時である。昼間とは違いラクラクの車線変更だった。

横羽線に入ると、すぐ左側に素敵色に彩られたレインボーブリッジへの分岐があるのだが、そんな飾りに目もくれることなくウシガエルは直進する。まるで潮気を感じさせない、ビル群の激しい大波に揉まれながらも……

「そろそろ、いかな？」

紅しようが色のクーパーを自在に操る男は、助手席にそつと声をかけた。車内には、ボーズ・タウン・ギャングの『キャント・テイク・マイアイズ・オフ・ユー』が流れている。が、さも隣の客人を気遣うようにして、FMの音量は抑えられていた。

「もう話してもいい頃だよ……。君がどうしてあんな危険な所にいたのかぐらいさ」

男は出来るだけ優しい口調で言った。座席が二つしかない小さな車だけに、天井の幌がバタバタと唸って騒々しい。しかし、彼の意図するものは、彼女に確実に届いていた。

「居場所……」

少女は、震えるような小さな声で言った。

（居場所？ なんだいそれ？）

男は、喉元まで出掛かった言葉を押し戻した。いや、返す言葉に詰まっていた。

私立東横浜女子学院、二年A組『神谷美咲』十七才。そう生徒手帳には記してあった。言わずと知れた神奈川県屈指の名門校である。この生徒手帳は、現場で拾ったものだ。

(じよ、女子高生……！)

そう、隣に乗せているのは正に、女子高生。

自らと一回り以上年齢が離れた、水晶のように光り輝く年代である。纏うオーラは夕日の煌めき、檸檬の香り。厚手の山吹色のジャケットは重厚な金ボタンで鎖とくされて、丸みを帯びたシングル襟にお洒落なハンドステッチが可愛らしく光る。ちらり覗かせる純白のブラウスは、何ものにも換えがたい青春の証し。校章を模かたどるブローチに束ねられし赤きリボン、スパイシーなハーブのように料理そのものを引き締められている。そして、ねずみ色のツイード生地で作られたプリーツのスカートが、清流の如き脚線美をいかような怪しげな者どもからも護るようにして妖しい。

しんがりにして最たるは、彼女自身の容姿そのもの。御顔は果てまた仏蘭西人形にも勝るとも劣らぬ程の美貌、端正な芸術品。

彼自身どうして今まで平気でいられたか、摩訶不思議でならぬほどの「ドギマギ」が全身に襲い掛かってきた。

「あ、ああああ、……あのさ。横浜でい、いいいいんだよね？ 送って行くところ」

「えっ？ あっ、ハイ」

「どどどどどどどどどど」

「えっ？」

「よよよ、横浜のどどどど」

「……？ 元町の辺りです」

「ふ、ふうーん、やややや、やっぱりいいところのお嬢様なんだ？」

「そんなでもありません……」

美咲は笑顔を止めた。

正太郎は何かまずいこと聞いてしまったかと思いい、さらに焦った。「何が好き？」

「えっ？」

「いやあの……ほら、歌手歌手」

「あっ、ああ、アーティストですか？ なら、ちょっと古いけど」

GLAY』かなあ」

「ああ……あー、グレイね。あの目がでっかくて、魔女スティック
なんか関係しているという……」

「えっ……?」

「あっ！ あーっ、あっちのグレイね」

「あっち?」

「いいい、いやいいんだ。勘違い勘違い、へへへへへへ」

「へんなの……羽間さんて、ウフフフ」

一度、鬨^{かけ}りを見せた彼女に、笑顔が戻る。

正太郎は、なんとなく結果オーライに救われた。

(このへんで、話をもどさねば……)

彼は、雰囲気がよくなったことをシメシメとばかりに、もう一度
あの質問をした。

「あ、あのさあ。美咲ちゃん。君、なんであんなところにいたの?」

「えっ?」

「あ、い、いや。やっぱり気になるじゃない? だって間一髪だった
んだよ。それに制服だし……。大人の夜の街、あこがれの街『銀座』
に女子高生が独りフラフラ出歩いてるなんてやっぱり気になるじゃな
い?」

「……………」

美咲は黙り込んだ。案の定、仏蘭西人形は曇りガラスに閉ざされ
てしまった。

「そ、そうかあ。話したくないかあ。うんうん。しょうがないなあ。

まああるさ、誰だって。話したくない事のひとつやふたつ。俺だっ
てあるもんな、数えきれないくらい」

「……………」

「でもさ、君だってもう大人なんだからわかるだろ。あの『新世え
えじゃないか』って連中は最悪だ。社会科の授業なんかで習った
だろ。江戸末期の『ええじゃないか』騒動とは似て非なるもの、ま
るで違うって。江戸時代の『ええじゃないか』は討幕派が煽ったっ

てのもあるけれど、あれは大衆の鬱憤と明日への希望が混在して起きた、ただの馬鹿騒ぎさ。だが『新世』に限って言えばあれは破滅主義そのもの！ いや、破滅そのものだよ。『不鍵合症』が世界中に広まって、子供が少なくなつて、どの国も国力が落ちて、老人が増えて、このまま行つたら勿論人類自体が危うい、否、滅亡のカウントダウンが始まつているつてときに、突然うじ虫が湧き出るみたいに「ええじゃないか」とか言つてランチキ騒ぎさ。裸になつて踊るならまだしも、淫らな行為や破廉恥極まりない行為をして。挙げ句エイズやいろんな伝染病なんかを撒き散らして。近寄れば関係ない人まで巻き添えだ。中には自殺までするやつがいる。そんなのが何千人とデモみたいに行進するんだぜえ。確かにもう世紀末は過ぎたけれど、世も末だよ。ノストラダムスだつてびっくりさ。それに、世の中にはどうやって生き延びようか熱心に研究開発している人たちだつてっているつてのにさ。……そんなところに君はフラフラ出て行つたんだ。もう少しで君は取り返しのつかない事になつていたんだ。もうちょっと……その、なんだ……、自分を大切にしながら……いいよ」

正太郎は喉が熱くなつてしまつていた。まるで、心の導火線に憤然たる炎が燃え移つてしまつたかのように。

もつとも彼はこの瞬間、怒りと同時にとても後悔をしている。ああ、やっぱりこんなこと言うんじゃないかと、と。

三十路に乗りかかると、どんな男でも説教臭くなるつて悠里に言われたもんなあ。そんなんじゃない、若い女の子に嫌われちゃうぞつて言われたばかりだもんなあ

そんな事が彼の頭の中を過ぎる。相変わらず少女の心は、曇りガラスの窓を閉じたままであるし。

しかし、意外にも二の句を告げたのは美咲のほうだった。

「あ、あたし……」

美咲はうつむき加減に目をつむつた。

車窓からは、つる草のように生えた工業地帯の雑多なプラント群

が、汚れた光に煽られるように映し出されている。少女に痛々しい思いが込みあがってくるかのように。

正太郎は、彼女の思いが声帯に届き着けるまで、全休符をきめこんだ。

その時である

「殺して……。殺して！ あたしを殺して！ 羽間さん！」

美咲は突然ふって沸いたように大声をあげた。表情は鬼気迫り、白魚のような指をした小さな手は、正太郎の左腕をギツチリと握り込んでいた。

キメ細やかな透き通った肌が、嫌というほど接近している。星屑を散りばめたような美しい瞳が、嘘偽りのない台詞であることを物語っている。いたいけな少女の心が、何らかの物質を投げつけたかのように伝わってくる。

それでも正太郎は目線をフロントガラスから逸そらさなかった。そして、少女の意外な要望にも動揺を見せるでもなく口をひらいた。

「何を言っているの？ 変なこと言わないでよ」

正太郎はカラカラと笑い飛ばした。

「お願い羽間さん！ あなたしか出来ないの！ あたし、害人間なの！」

美咲は力強く言い返す。

しかし、

「害人間？ なにそれ」と、正太郎はそれを一蹴する。

「とぼけないで！ あたし、害人間なのよ！ 地球の害なのよ！

あたし見たの……。あなたがあの人を殺しているところ……」

「……！！」

「あたしたちは死ねないの！ 自分で死のうとしても死ねないの！ 殺されようとしても自殺しようとしても、何かが邪魔をして死ねないの……」

美咲は両掌で顔を押さえ、ワツと泣き出した。

「美咲ちゃん、変な冗談はよしてくれろ？ 命の恩人ていうか、君

の貞操の恩人ていうか、とにかく、君を助けたこの俺に言う台詞としてはちよつときついなあ」

正太郎は、苦笑いを浮かべた。そして、思い出したかのようにシートの間から缶コーヒーを二本取り出すと、左手で彼女の頬にひよいと押し付けた。

「飲みなよ」

正太郎は、もう一本の缶コーヒーのプルタブを片手で器用に開け、一気に喉の奥へ流し込んだ。「クウーツ！！　ギンギンに冷えてるぜ！」

彼女は、気温でキンキンに冷えたコーヒーを押し当てられ、心なしか冷静さを取り戻した様子だった。綿雪のようにキメ細やかな白い頬。そこをつたう一筋の涙には、春どけのせせらぎの如く一片のくもりさえも感じられない。

美咲は、心の冷却が進むにつれて、言葉が溢れ出るように口を開いてゆく

「どこかで聞いたことがあるの。……死なない害人間を簡単に殺す事が出来る人達がいる。その人達は地球にそう易々と存在しない。でもすぐ近くにいます。そしてこう呼ばれている。『無碍むげの人』と……」

彼女は、缶コーヒーを両掌で優しく抱きこむと、そのなめらかな頬にあてがった。

「ふうん……なら聞くけど、美咲ちゃんがその『害人間』とやら、だったとして、どうしてそんなに死にたがるのさ。……もったいない」

あくまでフロントガラスを見つめながら、正太郎は受け答える。「害人間は悪魔の子供なんです、きつと……。この一年の間に、世界中の人の間で赤ちゃんができなくなっちゃったのだから、きつとあなし達のせいなんです。世の中の人たちがおかしくなっちゃったのだからそうかもしれない。……聞こえるんです。みんなの悪口が……いいえ、世の中の悪意そのものが聞こえてくるんです。毎日毎

日、いいえ、いつでもどんなときでも……あたし、そんなの耐えられない……」

美咲は腕を抱え、ガタガタと震えだした。「それだけじゃない！それだけじゃないの！あたし達の悪意が現実となって現れるの。今夜だつて……」

「今夜だつて？」

「今夜だつて人を一人不幸にしたわ。あたしがあんな事思つたばかりに……」

美咲は、顔を手で覆つたまま動かなくなった。

正太郎は、怪訝な眼差しで彼女を問いただした。「あんな事つて、どんな事？言つてみてくれるかな」

「羽間さん……怒らない？」彼女は両手をゆっくりと外すと、小声で答えた。「でも……絶対に怒ると思う……」

「なんだよ、俺が何を怒るつて言うんだい？君に向かつて怒る理由なんてないさ。さあ、言つてごらん」

正太郎は、美咲に向かつてニツコリと笑つた。

「う、ううん……じゃあ、言うね。絶対に怒らないでね」美咲は上目遣いに正太郎を見ると、もったいぶつた様子で一呼吸おいた。「実はね……、あたしが殺させたの……羽間さんに。あの人を……」

「は、はあ?!」
正太郎は突拍子もない声を上げた。「な、何言つちやつてるの？そんなわけ……大体俺は」

「あるの！あの人も害人間だつたわ。あたし分かるの。自分が害人間だから。あの人は、最近になってあたしを追い回していたの。電車に乗るときはいつも同じ車両に乗ってきてこつち見てるの。あたし気持ち悪いからソツポ向いてたらいきなりそばにやつて来て

“お嬢ちゃあん、いい子だから僕ちゃんの　　になりなあ。でない僕ちゃん、ここの乗客みんな　　して　　を

つちやうからなあ。えへへへへ”　　つて言つてきて、あたし何言つてるのかちつとも分からなくて、でもすごく不愉快に感じてつ

い、「こんな人殺されちゃえばいいんだ！」なんて思ったの
「で？」

「で、それでもあの人がしつこく付きまとうから、とことん逃げたわ。京浜東北線から東海道線に乗り換えて、品川で降りてまた京浜急行で川崎まで戻って……また京浜東北で秋葉原まで行って山手線に乗り換えて……渋谷に着いたから人ごみに紛れたんだけど、どう言う訳が見つかったって、慌てて銀座線に乗ったの。すごく怖かった。だって相手は害人間、害人間は死なないの。相手もそれは知ってたみたい。だってあの人、歩道の信号が赤でも平気で渡って来てあだし目掛けて走って来るの。ただでさえ人ごみは悪意が聞こえ易いのに、どうしたらいいか分かんなくなっちゃって……。銀座はあまり詳しくないから逃げるだけ逃げていた……。したらもうボロボロ涙が止まらなくなっちゃって……。頭の中が突然くらくらして……。貧血起こして倒れこんじゃったの。したら羽間さんがやって来て……。あいつを後ろから……」

美咲はゴクリと唾を飲み込んだ。そして、あるうことか、ガクリ……と、死人の真似をしてうなだれて見せた。

「ち、ちよ、ちよ、ちよ、ちよと待つてよ美咲ちゃん！ 何だよそれ勘弁してよ！ 俺を人殺し呼ばわりするのやめてくれる？ いくらなんだって酷いよ。俺は君を助けた恩人なんだぜえ」

正太郎は、ようやく美咲の目をマジマジと窺^{うかが}った。

「そうよ、羽間さん。あなたはあたしを助けてくれた恩人。そして今からあたしを殺して、この苦しみから解放してくれる大恩人になるの」

「そ、そんな無茶苦茶な！」

「言い逃れしたって無駄なんだから。……だってあたしが羽間さんに助けてもらうのは、あたしの悪意。筋書き通りなんですもの」

「な、なんだって？」

とうとう正太郎は、声を裏返えらせてしまった。

「ごめんね羽間さん。あだし、あるスジの人から『無碍の人』の噂

を聞いたとき、これは使えるって思ったの。だって悪意が現実になつて現れるなら、あたしの悪意そのものを利用すれば死ぬことも出来るし、望みも叶うって。だからあの変質者と追いかけてこしたつてわけ。でも怖かった。『無碍の人』が現れなかつたらどうしようかと思つちやつた。……でも現れた。あたしは『無碍の人』にアイツをこの世から追い払つてもらおうと念じてた。そしてその悪意は現実となった。それなら次は、現れた『無碍の人』にあたしを殺してもらおう事。でも、ただ望んだのでは現実にならない。だから知り合いになつて直接頼んじゃおうと、あのデモ行進に出て行つたわけ。あの『無碍の人』を『ええじゃないか』に巻き込んでしまえっ！……てね」

美咲は、また正太郎の左腕をグツとつかみ、彼の頬に息がかかるほどの距離まで接近した。

「ねえ、いいでしょう？ 殺して！ 殺して！ あたしを殺して！ お願い！ 減るもんじゃないでしょう？ お願いだから、羽間さん！ 殺してくれないと羽間さんを悪意で呪っちゃうんだから！」
突然、彼女は発作を起こしたかのように喚き出した。正太郎は、ハンドルを握り締めていた左腕を急に強く揺さぶられたものだから、ガクンと急ハンドルを切つてしまった。当然ステアリングがぶれて、車は一回転！ スピンした

「うああーっ！」

「きやああーっ！」

紅シヨウガ色の彼の愛車は、タイヤを勢いよく鳴らしまくつた。

『トコロテン突き』のような道幅の狭い首都高の壁が、目の前に迫り来るが如く襲いかかる。この時、法定速度を上回る時速百二十キロで走っていたものだから、勢いもタイヤの起こす白煙も並大抵ではない。

正太郎は、明日の新聞記事をイメージした。

『深夜の首都高大惨事！ 女子高生拉致男死亡』

正太郎は、明日のワイドショーの見出しをイメージした。

『破廉恥！ ロリコン男 女子高生拉致……挙げ句大事故！』

正太郎は、今週の女性週刊誌の表紙をイメージした。

『無謀運転少女地獄！ 異常男と魔の深夜ドライブ 美人女子高生の制服逃亡劇的二十五時！』

正太郎は今月の……（以下省略）……とにかく、ありとあらゆる大量のイメージが一瞬にして駆け巡った。正太郎はこのまま死ねば、まず自分が悪者になってしまう事は間違いない、とNASAの集中情報システム室にあるスパコン並みに解析した。

それは、光が地球を七周半するあいだの出来事だった

「どおおりやああーっ！ 負けてたまるかああーっ！」

スピンし一回転半した車体は、斜めになったまま後ろ向きに横滑りしている。百万人の女性が悲鳴したようなタイヤの擦れる音が辺り一帯にこだまする。高速道路特有のジョイントに当たる感触が車中にも伝わってくる。

正太郎は、まず状況を確認した。

（近くに他の車はいない）

（ここは緩いカーブが続くが、幸いランプ>高速道路の出入り口<がない）

（起伏も激しくはない）

（タイヤは無事だ。バーストはしていない）

（車体が軽いから転がるかと思ったが、音からすればグリップは十分だ）

「いけるー！」

正太郎は本能が示すままギアを落とし、アクセルとブレーキを小刻みに踏み、車体が滑る方向と逆ハンドルを切った

見事だった。否、奇跡だった。ウシガエルの車体はいつの間にか何事もなかったように体勢が立て直されていた。『トコロテン突き』のようないやらしい壁に少しも擦る事無く前進していた。

「た、助かった……」

正太郎は、思わず胸を撫で下ろした。

だがしかし 彼は納得がいかない。

急激な血糖値の上昇と、アドレナリン分泌過多により今更になって動悸が激しくなっていた。今更になって恐怖が押し寄せてきたのだ。

「ハア……ハア……ハアハアハア……」

これというのも、とんでもない女子高生を助けたおかげで……と後悔が彼の頭の中を過ぎる。羞花閉月しゅうかへいげつよろしく、誰もが羨むほど魅力的な女子高生は、とんでもないプツン娘（死語）だったのである。

しかし、この一大事を巻き起こした当の本人はと言うと、さすがに恐怖に耐え切れなかったのかシートにくっったり気絶しているのである。

「殺されたがっている割には、かなり怖がりみたいなんだよねえ……」

…さて、どうしようかね、この娘。現場見られちゃったんだよねえ。彼はとりあえず、高速を降りてゆっくり考えることにした。

まさにこの時の正太郎には、後悔先に立たず、というフレーズが耳元に聞こえているような気がしていた。

魅惑の女子高生 了

1 魅惑の女子高生（後書き）

Q ウイスキーでへべれけになるまで酔っ払ったレッサーパンダが、有価証券取引法違反で50代前半のスケバンに捕まった。どうやらデビュー前らしい。

さて、君ならどう弁護する？

2 検問 その1 (前書き)

シリアスな部分と、ちょっとパロディズムな部分があります。
ここからは、何となくシリアスかな。

2 検問 その1

2 検問 その1

正太郎は、むっつりと口をつぐんだままカーラジオを聞いていた。時折、右手の人差し指で鼻の横を掻いてみては、またハンドルに手を置いてリズムを取る仕草をする。これは、彼の考えがまとまらない時の癖なのである。

「もうひとつランプ（出入り口）を過ぎたら、高速を降りてみるか……」

“生麦”と文字の書かれた表示看板を目で追いながら、また結論を先延ばしにする。

彼は、助手席で横たわる少女の寝顔に目をやると、フツと鼻笑いをし、また指先で鼻の横を掻く。

「この俺が……こんな娘に、現場を見られていたなんてな……」
愚痴を二言三言口にして、また溜め息を吐く。先ほどからこれの繰り返しだった。

気が付くとハンドルを握る右手がひどく湿っている。ぬるぬるとした汗で濡れた手は、正太郎の心をひどく表したものである。彼は、納得のいかない表情でかぶりを振ると、エアコンの吹き出し口にそっと手を差し伸べて、不安な気持ちと一緒にそれを吹き飛ばす。

彼にとつてのこの夜の雰囲気は、ただならぬものである。

何故なら彼は、未だかつて殺しの瞬間を他人に見られたことがなかったのだ。それが、通行人の視線が飛び交うようなスクランブル交差点のど真ん中であっても、テレビ中継の生本番の最中であっても、彼の異能をもってすれば、周りに殺しの瞬間だと認知されることはなかったのだ。

当然、そのような場面での殺害は危険性が伴うので避けているが、

それだけの確たる自信はあった。

「なのに、どうして、こんな娘に……」

正太郎は、後悔と自省の念に苛さいまれながらも、新たな選択を余儀なくされていた。

（確かにあの時……この少女が『新世ええじゃないか』に巻き込まれているのを放っておけば、こんな葛藤もせずにいられたはずだ。だが、俺は彼女に殺しの瞬間を見られていた。そしてそれに気付いてしまった。それが許せなかった。どうして彼女が殺しの瞬間を感じてしまったのかの理由が知りたかった。だから、つい助けてしまったんだ。なのに、あんなわけの分からん妄想が理由だったなんて……）

たった今、地元のFM局から流れていた軽快な音楽が止み、午前二時ちよほどの時報が知らされた。この時間帯なら活動している人は極端に少なく、人目に晒される危険性はかなり低い。

正太郎にとつての厳しい選択が、刻一刻と迫りつつある。

（俺は、この少女を殺さなくてはならないのだろうか？ こんないたいけな少女を葬らなくてはならないのだろうか？）

幾度となく自問する。しかし、この神谷美咲という少女が本当に殺しの瞬間を目撃していたのであれば、早急に手を打たなければならぬ。

無論、彼女の不確定な言い様を逆手に取って口裏を合わせることもできる。しかし、このまま葬ってしまうえば、確実に口封じができる。この夜の出来事を口外される危険性は格段に減る。だが、どちらを選択したとしても、それなりの代償を伴うのは火を見るよりも明らかなのだ。

とはいえ、それを迷っている時間はもうない。これからどうするのかを先送りばかりしているのは、隠蔽に最適な時間帯を通り過ぎてしまう恐れがある……。もし彼女を葬る選択をするのであれば暗いうちがいい。しかし……

さすがに今夜は、銀座界隈での大それたデモ騒動があったおかげ

で、交通量はより激減している。この少女を始末するのであれば、正太郎にとって絶好のチャンスと言える。

彼は、先ほどからバックミラーで逐一後方から来る車両の有無を確認していたのだが、“大師”の出入り口を過ぎた辺りから、あまりヘッドライトの光を感じていなかった。首都高速の状況を示す電光掲示板に、さほど重大なサインが出されてなければ、前方に交通規制もない。

この状況は、あの大所帯のデモに警察官が総動員で借り出された副産物なのである。『不鍵合症^{ふけんごうしょう}』という得体の知れない病が蔓延するようになってからこのかた、人々は少々投げやりな精神状態になってきている。

その精神状態を示すように、『新世ええじゃないか』などという狂気のデモ集団を生んでしまった。

警察官とて人の子である。『新世ええじゃないか』に参加し、勤務をおろそかにしてしまう輩がいてもおかしくない状態なのだ。あのイカしたデモ行進が行われる夜は、慢性的にどの職場においても人手不足に陥っているのである。

殺るなら今しかない

彼は、少女の首筋にそつと左手を差し向けた。まだ完全に成熟しきれていない少女の体は、生まれたての子猫のように無防備だった。純白のブラウスから這い出ている首筋が、生々しい白い光を放つ。

この少女は一体何者なのだろうか？ この少女は本当に殺しの現場を見たのだろうか？

もしかしたら、金欲しさの強請^{しやうべい}なのだろうか？ 若さ故の血気に満ちた冗談なのだろうか？ それとも狂信的思考に支配された、新車の妄想信者なのだろうか？ それとも

彼の困惑した思考は、未だ様々なケースを考慮した上で、複雑なラインを描いている。出来る事なら殺したくはない。あの一件と関わりのない彼女に、何の恨みもない。

しかし、社会的位置をそれなりに確立している彼の生活で、これ

ほど危険な存在はない。まして、今現在、その位置から転落するわけにもいかないのだ。

(俺には……悠里がいる)

心中は、全く灰色に混じる事のない葛藤を繰り広げていた。

にも拘わらず、かの少女は、ぐったりとしたまま安らかな表情で眠っている。彼女の白く透き通った肌は、ぽつりぽつりと高速道路に備え付けられている照明によって反射し、まぶしい光を放っている。すうすうと安堵の寝息をたてるたびに、絹のように滑らかな長い髪がさらさらと波打って跳ね上がる。健気に缶コーヒを握りしめた指が、大理石のように涼しげな匂いを解き放っている。

見れば見るほど美しい

まったく邪念を感じさせない彼女のオーラは、汚れきった正太郎の愛車のシートに似つかわしくなく感じられた。

(惑わされるな、羽間正太郎！ このまま彼女を闇に葬ってしまったえば、今夜の大失態は全て無効になる。それでケリはつく。この少女もそれを望んでいたではないか)

極論こそ得ていた。たとえここで人ひとり殺したとしても、何事もなく偽装するなど今さらどうと言う事はない、と。しかし……

外傷や他殺の痕跡を残さずに殺害する。そして、死体は何らかの理由で事故にでも巻き込まれたかのように偽装する。それが彼の手口。常套手段。完全なる生活の一部。

これまで、他人様にばれた事などたった一度もない。今までやって来た事を鑑みて、全く問題はない。こんな娘一人を始末するなど、息をするより簡単な事ではないか。

だがしかし

「いかなる場合であっても、本末転倒だけは絶対にならぬ……」

と、自らを戒めるのが、羽間正太郎たる自我の拠り所であった。

彼は、八年前の某日に起きた“未だ忘れえぬ事件”からこのかた、並々ならぬ死線をくぐり抜けて来た。その苦難の道のりの最中、自らが保身のためだけに人殺しをするという、卑劣かつ、愚劣な行い

は、一度たりとしていなかったのである。

苦難の道のり　しかし、それはなにも、戦々恐々とした血へドロにまみれた荒野を、右往左往し、銃や弾薬を担いで駆け巡ったという意味ではない。まして、あらゆる修験者のように、日進月歩、日々精進しながら、山野を駆け巡りつつ無我の境地を見出すような荒行を重ねてきたわけでもない。ただ、この現実社会の、もつれあつた糸の中を、思うがままに駆け巡ってきただけなのである。

人はいつか、必ず死ぬ。黙っていても、必ず死ぬ。

羽間正太郎は、そんな世の中の普遍の道理に、少しずつ手を加えてきた、だけなのである。

しかしそれは、並の精神力では維持できぬ諸行であつた。

人を殺す……という、まこと荒^{すま}みきつた悪行が、この御時世、親子の間でさえ造作もなく行われてしまう悲しい時代である。であるがゆえに、他人様の命を絶つことが、まるで虫けらを殺すように、まるで飼い猫の毛皮に取り付いた蚤虫を潰しまくるように、いとも簡単に行えるものだと誤解しがちなのは、素人の浅はかさを意味している。

同類を殺す。人を殺せる。という心理は、時として精神崩壊を生む結果を意味している。これは、法律や戒律のような、あとづけの理屈なのではなく、人類が理性というものを維持するようになる前から、同種族を絶滅させまいとした何者かによって、ことごとくインプットされた、いわば安全装置のようなものである。

その禁忌を犯しながら、平然と、平然としたように見せかけながら、法治的な社会で生き抜くには、ありとあらゆる試行錯誤がなければ、この忌まわしき因縁の荒野を駆け抜けて来られなかったというわけだ。

ことさら、守られた　守られる事が当たり前になった当時勢において、なおさらの試行錯誤が必要とされる。それを、生きた見本として、標本として行ってきたのが、羽間正太郎の生き様であつた。

時には推理小説や、サスペンス小説にある精神異常的な登場人物をお手本として、精神生活を試みていた事もあった。時には戦時書物や、犯罪ノンフィクションの当事者の心理を読み取り、手本とする日もあった。だが、それは彼にとって、ことごとく違ったケースでの標本であり、全く役に立つものではなかった。

しかもそれらは、正太郎の意義に反していた。何故なら、彼の標的たる人物たちは、他人の心身を蹂躪した……そして、愛する女性を悩まし続ける犯罪者であったからだ。

無論、犯罪者ならば、司法や警察に依頼し裁いてもらえるほうがいい。

しかし、正太郎に対を成した犯罪者どもは、警察や検察などの手が及ばないものたちだらけなのである。さりとて、裏社会が関与するような黒々した権力の圧力でもなく、国家間のどろどろとした抗争に由縁を持つものでもない。なんとというか、ただ、念入りに絡められた暴虐な罠に苦しめられている……という、全く掴みどころのない思惑に巻き込まれている状態なのだ。

そして彼は、ただ、自分たちに害を与える者どもへの『唯一無二の抵抗』として、やむを得ず“人殺し”をしなければならなかったのだ。

そういつた意味で、正太郎には教授されるような師匠的位置の存在は皆無であった。だから、一日一日の心理経緯の積み重ねで、心の充足を補うしかなかったのだ。

たった今の、この時もそうである。

表向き三十路に足を踏み入れた年齢になり、八年間という殺しを伴う裏の生活の中で、初めて出会う衝撃。そして戸惑い。これは、何ものとも計りあうことのできぬ堪えがたい葛藤であると言える。

その葛藤に打ち克つには、どんな死線を越えてきた彼の経験則を使用したとしても、

「至難の業である……」

というわけである。

そして、この羽間正太郎が、いたいけな少女　神谷美咲を、もし、死に追いやってしまったとすれば、彼自身の理性の堰はことごとく切れてしまっていたであろう。

それはすなわち、

「俺は単なる殺人鬼になっていたのかもしれない」

という岐路でもあったのだ。

そう。そういう事すべてにおいて、彼自身が一番危惧している。それゆえに、正太郎は心穏やかではいられなかったのだ。

だから今、十七歳のこれからの少女　神谷美咲の、未成熟で美しい寝顔を見るたびに、正太郎の太く生えそろうた逞しい眉根が、ゆったりと下ってゆくのである。

（そうだ……、あの事件の時。悠里と出会ったときが、彼女の誕生日……十七才だったんだよな。全く……俺ってヤツは、どうしてここまでの事をやってきたのか、危うく見失うところだった。そういう意味でこの少女は……。感謝しないといけない……）

また、鼻先の横を右手の人差し指で搔いて、反省する。

と、しかし、その人の心を取り戻した事を喜ぶ反面、捨て置けない事実もある。

（でもな。……彼女が言う“害人間”っていうのは、一体何のことなんだ？　さすがにさっきまで取り乱していたからな。俺は美咲ちゃんあの言葉を、若気の至りの妄想だと受け取っていた。でもな。俺の異能の瞬間である殺意に気付いたともなると、これは尋常じゃない。予測……というか、“念じていた”から知っていたって事が、もし本当なら……もはやこれは馬鹿にした出来事なんかじゃない。でも、そんな事が本当にあるものだろうか……）

異能を持つ者は、得てして、他の異能者の力というものを受け入れがたく感じてしまう。何故ならそれは、本人の持つ異能の力というものが、極自然に、肉体的にも精神的にも溶け込んでしまっているからなのだ。

地球上の生き物の殆んどが二つの瞳で物を見るように、日本人の

殆んどが何の抵抗もなく蕎麦をズルズルと噉^すつてしまつように、本人達からすれば極々当たり前になつてしまつている事象が、突然、「あたしは目で匂いを嗅げるのよ」「蕎麦はフォークとナイフを使ってお上品に食べるものなのよ」「と言われ、眉唾ものにも近い混乱を引き起こしてしまつ……ことに、どことなく似ているのである。それゆえに、他者が主張する異能に対しては、ことごとく敏感にならざるを得ない。

まして、

「未知の能力だつて、何らかの根拠があるはずだ……」
と、口から火の出るくらい信念を持つている。

羽間正太郎は、頑^{かたく}なに自らの異能について口外していない。が、しかし、偶然や奇跡などという突飛な事柄が世間で騒がれるたびに、「理由のない偶然など有り得ない。……絶対に何か絡み合つている……」

と、言葉を漏らしてしまうほど“ひょん”な偶然性を信じていない。

ほぼ病的にも感じられる疑心暗鬼な性格ではあるが、それほどの感覚を維持していなければ、愛する女性どころか自分の命でさえも守り通せていなかった。そして、その異能でさえも、使いこなせなかったであろう。

さて、その異能とやらに関してはのちのち述べて行くことにして

愛車の助手席に横たわる少女、神谷美咲を葬る事を辞した羽間正太郎ではあるが、実は本当に困り果ててしまつはこれからである。

この少女、これだけ魅力的な容貌である。ある意味、スレていないというか、熟れすぎていないというか、妙に儂げであるがゆえに、その対処に躊躇^{ちゆうじゆ}してやまないのである。

「いつものように首を絞めて吐かすつてわけにもいかんしな……」

相手が正太郎の標的であったなら、その折檻せつかんぶりも容赦なかったであろう。だが、触れる事さえ躊躇ためらわずにはおれない美少女相手では、さすがの百戦錬磨とて試行錯誤するほかない。

「害人間」の事も聞き出したいけど……、相手は女の子だ。このまま連れまわすつてのもな……」

今はもう真夜中だ。草も木も夢を見ている時刻である。なれば、彼女の親御さんとてひどく心配しているに違いない。まして“こな”娘を持つ親であれば尚更である……と、妙に納得せざるを得ないところなのだ。

「いい気なもんだぜ、まったく……」

正太郎の溜め息は、足元にまで及ぶ勢いだ。

と、すやすやお姫様気取りで寝息を立てる美咲を横目に、正太郎は、ウィンカーを左に上げギアを落とし、アクセルを少し緩めた。「おっと、目の前が“東神奈川”の出口だ。俺の家も近いし、ここで降りよう。たとえ美咲ちゃんの家の下道の道で送っていったとしてもそれほど遠くないしな……」

いつもの疑心暗鬼な正太郎であれば、このような判断は下さなかった。それは、どことなく甘い希望的観測であった。

“殺し”のあった後で、普段なら電流がひた走るほどピリピリした感覚を持っていた。「人の生死に関わった」後の人間の心理は、果たして尋常とは思えぬほどの神経が張り巡らされるものだ。たとえ、完璧にその仕事をやり終えても、その完璧を誇るテンションであるがゆえに、鋼に高圧電流を流したような煮えたぎる熱いものが混みあがってきているのが普通である。正太郎とてそれは同じことなのである。

しかし、やはり、この神谷美咲という少女に出会ったお陰で、なにかアンテナが狂ってしまったようだ。なにか、どこか甘い香りのするものを嗅いでしまったがゆえに、正太郎のその感覚は常人とほぼ同程度のレベルまで下っていたのである。

「ん……？」

首都高速の“東神奈川”出口のスロープを下り、ギアを落としつつゆっくりスピードを緩めると、停止線があり、赤信号が待っている。ここの出口は丁字路になっており、第一京浜 国道十五号線と、米軍基地 ノースピア を繋ぐ幅広い道路が横たわっている。そのため、一度必ず停止しなければならぬのだ。

その時である。

正太郎が停止線で信号待ちをした時、予期していなかった、いや、予期する事をし忘れたものが視界に入ってきた。

「な……、け、検問？」

声が震えた。それは世間様に後ろめたさを感じ、恐れを為したからではない。自らの愚かさ加減に、恐れ参ったからだ。

そう、正太郎の瞳に映るもの。それは正しく、警察の検問であった。ドアの横に神奈川県警と書かれた二台のパトカーが連なっている。夜の闇に異常に映える赤々とした回転灯を自動式の昇降機で高々と掲げ、「我々は市民を守る国家機関である」と大仰に誇示しているのである。

「ご丁寧に二人の警官がチカチカとした誘導灯を構え、こちらの車を出迎えてくれているのが分かる。海が近く、妙にシン……とした暗がりではあるが、警官が装備している夜光ベストが白く映えるせいで人のざわめきが目に伝わってくる。車外に出ている警官は二人であるが、おそらく車内にも数人待ち構えているに違いない。時折、パトカーの車中に夜光ベストの光が反射されている。

「まいったな……」

正太郎は、ボソリと声を発した。その言葉より深刻な面立ちで奥歯を噛む。

2 検問 その1（後書き）

Q、布団に寝ると子供が出来にくいので、押し入れで鍋をする事に
した。しかし、桃太郎がそれを許さない。
さて、お蝶婦人の月々のパーマ代はいくら？

2 検問 その2

2 検問 その2

「なんだってこんな夜に、検問なんてやっていやがるんだ……」
人というのは、考えのうまくいかぬ時ほど、口から言葉が多く出てしまうものである。彼は、自分がぼやいている事にさえ気がついていない。

しかしながら、それは分からないことではない。なぜならそれは、東京のど真ん中、銀座界限で、あの『新世ええじゃないか』のデモ行進が行われた夜だからである。

原因不明で、恐ろしい伝染力を持つ、あの、『不鍵合症』^{ふけんごうしょう}という病が蔓延してからこのかた、国家内部にも、言うに止む無い新しい事情が出来てきた。

その中でも、警察や自衛隊という国家治安・防衛組織の人手不足は深刻さを増すばかりである。なれば、東京で起きた暴動や事件であるとして、隣県と同組織が手を貸さないではいられない状態なのだ。人口は過密さを増すばかりの昨今ではあるが、どの分野においても人材の不足化は、目に余るほどのものなのである。

なのに、これはどういうことなのか……。

「こんな所に、こんな時間に……」

羽間正太郎は、普段から自らを冷静であるべく、次の行動パターンを何百通りも用意している。

標的が反撃してきたとき

標的が別のことを目論んでいたとき

何らかのアクシデントで、標的を見失ってしまったとき

そんなあらゆる状況を、将棋の棋譜きふのように何百通りも張り巡らせ、“人殺し”を行ってきたのである。そうでなければ、いくら“異能”を持った彼でも、すべてがうまく行くはずがない。が、しかし……。

どうにも、この美少女と出会ったことで、すべてのリズムが狂い始めている。思うようにステップを踏めないのである。それはまるで、思わぬ新米ルッキに値千金の先制パンチを喰らい、よろめき、足許あしもとが震えだしたベテランボクサーのようなものである。

「たまったもんじゃねえぜ、これは……」
ぼやきのスピードが増す。

そんな彼の中に、ジリジリとした焦りが胃の腑の奥底から込みあがってきた時である。

「羽間さん……」

今の今まで、沈黙が保たれていた助手席側から、小鳥のさえずりにも似た儂い美声が聞こえて来る。無論、先ほどまで正太郎がその扱いに困り果てていた美少女、美咲である。

「な、なんだ、美咲ちゃん……。気がついたのか」

正太郎は、咄嗟に苦虫を噛み潰したような表情をやめた。そしてすぐさま、まるで本のページを軽くひとめくりするかのようにつとと言う間に恵比寿大黒のような柔らかな表情で取りつくる。どうあっても、何があっても、誰にも、裏の表情を見られたくはないからだ。

彼は、輪をかけたように大人びた、優しい声で問いかける。

「気分はどうだい？」

「うん、大丈夫……」

「まったく……、キミって娘こは、とんでもないことをするんだな」
「本当にごめんなさい……」

少女の声は、蚊の鳴くよりも小さな声である。

どうやら、この少女とて数分前に起きた……いや、起こしてしまった出来事の重大さに、さすが気がついてるようである。

正太郎は、フツと鼻笑いをし、包み込むような笑顔で、

「今、高速を“東神奈川”で降りた所だ。まあ、ここからなら元町の辺りまでそうは時間が掛からない。近くのコンビニでアイスクリームでも買ってあげるよ。好きだろ？ 甘いもの」

「うん……」

「ほら、元気出せよ。美咲ちゃんを無事に家まで送り届けるからさ」

「うん……」

「ほら、ほら、キミをあの『ええじゃないか』から助け出したあとに、約束したじゃないか。横浜の自宅まで、無事に送り届けてあげるって」

「うん……」

美咲は表情がかたい。正太郎の屈託のない表情に、どうしても反比例してしまう。どうやら今の美咲には、思いのたけが言葉にならないようだ。

何かを言い出したいのだが……。

「……………」

いろいろと頭の中に駆け巡る事がありすぎて、言葉にならないのだ。

正太郎は、そんな彼女の取り付く島もなさそうな顔色を窺つと、もうそれ以上の言葉を投げ掛ける気にもならなかった。

首都高速の降り口と、一般道を繋ぐT字路の信号は、まだ赤色のままである。この辺りは、直接民家が建ち並んでいるわけではない。へドロに満ちた運河のような水路と、要塞のように立ちはだかる下水処理施設がそびえ立っているだけだ。国道十五号線に差し掛かる交差点の辺りには、殺風景なテナントビルと、なんらかの店舗の明かりの消えた街並みが見えるだけだ。

遠くの方から、霧笛の低く野太い音色が聴こえている。

沈黙の中、神奈川県警と書かれたパトロールカーの赤い点滅の光が、彼らの複雑な表情を照らし出す。

そろそろ目の前の信号機の色が変わるタイミングである。

2 検問 その3

2 検問 その3

検問が目の前に立ちほだかる。

正太郎は、美咲に話し掛けている最中でも、何を言っ取り繕うか、何を言っ切り抜けようか、この状況をくぐり抜ける為の思案を駆け巡らせていた。

彼の、裏の事情が事情であるだけに、警察とはかわり合いになりたくはない。そして、彼自身、かわり合いを少しでも持たぬように最善の努力をしてきた事実がある。歴史がある。

（それがどうだ。彼女を助けたばかりに、こつも簡単に……。この俺が警察に世話になるのは、運転免許の更新のときくらいだったんだぜ……）

心の中でぼやく。ぼやく……。

彼は、プロの殺し屋ではない。他人様から依頼を受け、それ相当の報酬を貰い、それで飯の種にしているわけではない。だから、警察から身を守り、司法から悠然と逃れられるようなセオリーなどは持ち合わせてはいない。だから、少しでも疑いをかけられるようなかわり合いを持ちたくはない。

確かに、創意工夫を重ね、百戦錬磨の“殺し”の経験を積んできてはいるが……。

言うなれば、肩書きは一般人なのである。市井しせいの民に過ぎないのである。

そんな彼が、“殺し”と“市井”を両立するには、並々ならぬ努力というものがあつた。事実、彼の頭脳と、労力と、体力は、本来の一般市民の及ぶところではない。

そんな霧の中に埋もれた鉄壁の楼閣に、微塵の穴が開かれようとしている……。

真夜中に、年端もいかぬ女子高生を連れている。誰もが羨むほどの美しい女子高生を連れ抱えている。

これが、どういう誤解を招くのか、分からない正太郎ではない。これが、どういう結果を招くのか、思考を巡らせない正太郎ではない。

(根掘り葉掘り聞かれて、御用だなんてことがあったら……)

あまりにも間抜けな話である。

彼はまた、膝小僧にまで及ぶ溜め息を吐く。

「いい大人が、こんなおいしそうな女の子を……」

と、外野どもが、よからぬ想像を掻き立てるのに十分過ぎる材料がそろい過ぎている。人間の欲望は、あらぬ妄想を掻き立てるものだ。

さらに

羽間正太郎といふこの男自体が、大問題なのである。

彼の愛車は、重量一トンにも満たない、ライトウエイトの小型スポーツカーである。好天の日には、天井の幌を全開にし、独特の開放感を満喫する仕掛けになっている。

そんな小型車を使用しているにも拘わらず、彼の体躯は、身長180センチメートル近くにも及ぶ。筋骨がミシミシと張り出すような威圧感。そして強靱な肉体から醸し出すオーラ。

いくら市井の民と言っても、個性に事欠かない容姿は、隠し通すことは出来ない。

さらに

二昔前の銀幕スターを連想させるような濃い顔立ちは、誰の目に見ても印象的すぎる。

まるで猛禽類の口ばしを連想させるような鼻頭に、ぼつてりとした厚めの唇。いつでも湖面のように濡れている鳶色の大きな瞳。墨絵筆で力強く書き記したような一文字眉毛。

どれをとつても、彼を一度見たら忘れない。そんな彼が、裏の顔を持つという事は、並々ならぬものがある。彼の“黒い”部分の表情を見れば、相手はたちまち萎縮せざるを得ない。

だから唯一、

(普段の時だけは、笑顔は絶やさないでおこう……)

そう心に決めている。そういつた毎日がある。彼には、それ相当の自覚があるのだ。永遠に混じる事のない、白と黒の毒薬を胸の中に抱きつつ……。

しかし、どんなに笑顔を絶やさず、善人面を気取っていようと、この状況下は不利であることに変わりはない。

(さて、どうしたもんかね……)

この時の正太郎の複雑な心境は、地球上の誰にさえも測ることは出来ない……。

霧笛がまた、どこかで鳴り響いている。

2 検問 その3（後書き）

Q キミはカラオケに行った。突然マイクの中からマヨネーズが染み出してくる。さらに火花が散っている。

「ああ、100点だ……」

さあ、キミは明日からどんな色の靴下を身につける？

2 検問 その4

2 検問 その4

と、その沈黙を打ち破るかのように、美咲が突然、

「どうして殺してくれなかったの……」

そう言い放った。

正太郎は、さすがに、またふり出しに戻ったのか……と、身構えた。だが、彼女の頬からは、再び、一筋の涙が流れてきている。

(なんとも、女の子の涙は本当にやりにくいものだな……)

正太郎はそう考えながら、鼻で大きくいきを吸い込み、困惑した表情で、その場を取り繕うように答えた。

「バカ言うなよ。まだそんな事いつているのか。まったくこの分かんず屋は……。いいかい？ 俺はね、キミの思っているような殺人マシーンなんかじゃないの。人殺しなんかじゃないの。キミに都合のいいヘンテコな妄想劇を押し付けるのはよしてくれるかな。まださ、そう、なんていうか……。女の子特有の恋愛妄想物語を語られる方が少しはマシってmondaze……。俺はね、極々一般的なサラリーマンなわけ。一般労働者であって、給料取りなの。いいかい？ スイス銀行に特別口座なんか持ち合わせちゃいないし、特殊なライフルなんかも持ち合わせちゃいないの。ね、わかるかい？ そんな一介の不甲斐ない男に、人殺しなんてさ、出来っこないだろう？」

チラリ見る美咲の表情には、なにやら真っ直ぐなものが込み上げてきている。

美咲は、まったく正太郎の言い様など意に介さない口ぶりで言い放つ。「だって、あたし……見たもん」

彼女の声は、相変わらず蚊の鳴くように小さい。しかし、頑とし

て、強いものが伝わってくるのである。

正太郎はこのとき、今の美咲の言葉に、果てしない衝撃を感じていた。

（や、やはり今、“見た”と言ったな……）

有り得ない。普通では有り得ない。この少女の感覚は普通ではない。彼女の“見た”という記憶は事実なのだろうか。果たして本当に“見た”のであるうか、と正太郎の脳裏の中に、再びあの“害人間？”という不可思議な疑問符が込み上げてくる。

「あ、あのね。み、見たって……ね。そ、そそそ、それ、キミが見たのは夢かもしれないじゃん！ ほら、こんな夜中なんだからさ。そ、そうか！ 美咲ちゃん、キミもしかして、夢遊病とかのケがあるんじゃないの!？」

「ないもん。そんなの……」

彼女は、両手に抱えていた缶コーヒーをつかみ直し、くるくると回す。

「だったらさ、きっとそれは幻でも見たんだよ。極限状態だったんだよ、あの時……。人はね、窮地に追い込まれると、ありもしない幻覚を見てしまう事があるんだ。良くある事なんだよ。な、恥ずかしがる事なんかないさ。だって、それが人間なんだもの」

正太郎は、どこかで聞いた風な言い回しを、もっともらしく言い放った。普段からのこんな言い回しをするのが、彼の常套句でもある。

しかし、

「うそだもん。そんなのうそだもん……」

美咲は一向に受け入れようとはしない。

目の前を横切る誰が渡るわけでもない横断歩道の信号が、チカチカと点滅し始めている。正太郎は、そろそろこんな会話を終わりにして、検問に備えなければならぬ。

だがしかし……、

「羽間さんは、知らないだけ……。羽間さんはいい人過ぎるの……」

美咲が、わけの解からないことを言い放つ。

正太郎は、彼女のまるで話の脈絡のなさに、つい、声を荒らげてしまった。「な、なにをこの俺が知らないって言うんだい！ なにがいい人過ぎるって言うんだい！ 大人をからかうのはよしてくれるかい？ キミの話には、いくら俺だつてついて行けなくなるよ！」

正太郎は、いきなりの激しい口調で言い放つてしまったことに一瞬後悔をした。しかし、当の美咲は、まるで深遠の森の中にある湖の水面のように、静けさを保ったままだった。

そして、静かな、優しい高音のヴァイオリンの音色のような口調で、

「分かっているよ……、分かっているのよ……。羽間さんは、決して悪い人なんかじゃないし、ひとを“殺してなんか”もいない。ただね、ただ、苦しんでいるだけなの……」

そういつて、もうひと粒、光るものをこぼした。「もう、苦しまないで……」

「な、なにを言ってるんだい。なにが言いたいんだい。わけが分からないよ！ 美咲ちゃん！ キミはいつたい、この俺になにをして欲しいんだい！？ なにが目的なんだい！？」

正太郎は、さすがに微笑みを押し通すことが出来なくなっていた。だが、美咲は、それが当然とばかりの様子で、シートとシートベルトに挟まれるようにしてあずけていた体を反転させ、また、正太郎に寄りすぎりながら彼の左腕をつかんで来る。

「おねがい、羽間さん聞いて！ 私ね、私ね……」

2 検問 その4（後書き）

「ウルトラ ブンなんだ……」
バビヨーン！！

正太郎は、明けの明星の彼方に飛んでいってしまった。

……なんて事はないです。

2 検問 その5

2 検問 その5

彼女の表情からは、なにやら意を決したような迫力がみなぎっている。もう、なにか、揺るぎない何かを伝えようと、必死なものが込み上げてきているのが分かる。

しかし、このとき……、目の前の信号が、ちょうど青になった。

正太郎はこの瞬間、美咲の話を聞こうとはしなかった。いや、聞こうとしなかったのではないのかもしれない。

ただ、

(目の前にある、いやなものから片付けてしまいたかっただけ……) なのだ。

だから彼は、即座に左足に力を入れ、クラッチを踏み込み、シフトレバーをローに入れ、アクセルを軽めに踏み込んだ。もちろん正太郎の視界には、美咲が必死に話しかけてきている姿が見えている。涙ながらに、強い意思で何かを伝えようとしている姿が見えている。しかしながら、当然のごとく、正太郎には美咲のその一言が伝わっていない。

なぜなら、彼の愛車の ほどよくチューニングされた四気筒エンジンの エキゾーストの重低音が、美咲の声を掻き消してしまっていたからである。

(この難関を切り抜けてから、ゆっくりと聞いてあげよ。それまでは……。アイスクリームでも舐めながら、ゆっくりとね……)

正太郎は、彼女の言葉を、さも受け取ったかのような振りをしつつ、ニッコリと微笑んで見せた。しかし……

彼が、そんなことを考えている間にも、美咲がなにやら言葉を放っているのが受けて取れる。口をパクパクと大きく開け、腕をつかみ、力強く話しかけてくる。その行為が、どれほどまでに重みがあるのか……

このときの正太郎には、まるで理解できなかった。

そう、彼の頭の中では、今の美咲の必死の言葉より、

(この検問を、いかに、どうやって、平穩無事にくぐりぬけようか……)

のほうが、最優先課題なのである。

そう、“市井”での立場を守るために。愛する女性との幸せな空間を守るために。

だが、のちにその判断は、

(最大のミスだった……)

と、痛感することとなる。そう、その優先順位の位置づけこそが、羽間正太郎のこれからの生き様を変えてゆく、最大の岐路であったと言っても過言ではない。

彼の“殺し”の手際と、“市井”の狭間には、今まで培じゆかわれてきた経験に裏打ちされた“読み”というものが存在した。ここぞと言う時に、その感性は発揮された。

だが、その“読み”という、はかり知れない能力が、彼女と出会った事により、弱くなっていたのは事実である。果たして、この作用は何を意味するのだろうか。何を示唆するものなのだろうか。

無論、のちに正太郎は、この時のことを心底後悔することとなる。後悔というものは、決して、したくするものではない。が、人間にとって、これだけは避けて通ることはできない試練なのかも知れない。

まさに試練。いくらあらゆる“棋譜”を用意している正太郎とて、この時の美咲の言葉が、それほどまでに重大な意味を成してくるなどとは、夢にも思えなかった……。

T字路の交差点を発進した彼の愛車は、目の前に立ちほだかる神

奈川県警と書かれた、二台のパトロールカーの並びへと、吸い込まれるように誘導されてゆく。赤い、チカチカとした参列は、彼にとつて極度の緊張を呼んでいる。

これが、裏の事情を持つ者の性であるのか。これが殺人者たる負い目なのだろうか。

（“あの瞬間”よりも、胃の辺りがグツグツと言っていやがる……）
正太郎の座りかけた大きな瞳に、赤黒く燃えるような血流がドクドクとみなぎってくる。

2 検問 その6

2 検問 その6

正太郎は、思わず舌なめずりをした。

そして彼の、指の先。舌の先。つま先から頭髮の先端。そしてあらゆる肉体の先端部分にまで、これとない黒々とした血流が巡り及んだ時、

(すべてを消してしまえば楽になる……)

彼の意識の半分が、そう語っている。

そしてもう半分の意識が、

(闇雲に絶つことはならぬ……)

激しく抵抗する。

彼の中の、永遠に混じる事のない毒薬は、相変わらず熱く冷え切った葛藤を繰り広げる。そして闘い続ける。そしてまた、右手の人差し指が鼻の横を搔く。

(俺は人間だ。俺は人間なのだ……)

言い聞かしながら、鼻から大きく息を吸い込み、また口から吐く。それを三度繰り返す。あわよくば壊れかけた心を取り戻しながら正太郎は、二人の警察官の誘導に促されるまま、車を路肩付近に横付けし、止めようと右足をブレーキの上に置こうとした。その時である。

「だめ！ 羽間さん、今、車を止めちゃダメ！」

美咲が大声で正太郎の左腕を揺すった。それはもう、彼のデニム地で縫製された深緑色のジャケットの袖が破れんばかりの勢いであった。

「あ、ああ……！！！」

まさに袖を強引なほどまでに引っ張られてしまった正太郎は、ま

たもや不覚にもハンドルを急激に切ってしまった。案の定、高速道路を走行していた時ほどの勢いではないものの、ブレーキを踏みそこなった彼の愛車はあらぬ方向へとUの字を描きながら、路肩近くに停めてあったパトロールカーへの並びへと突進してゆく。

鈍い音がした。鈍い衝撃が彼らの体じゅうに及んだ。そして、正太郎の心の中に凄まじい動揺が走った。

（なんなんだ。なにが起きたんだ。どういふことなんだ！）

緩いスピードで体当たりをかました彼の愛車は、二台が連なっているパトロールカーの後車の後部座席のドア部分に軽く突き刺さるような格好で止まっていた。それほどの接触事故ではない。いわゆる大事故とは言いがたい。しかし、これは正太郎にとって大事件であることには間違いはない。

「あ……ああ……」

声にならない。

なんなのだ。この仕打ちはなんなのだ

言いたくても声にならない。

世の中には、二種類の間があるという。運の良い者と、そして悪い者。果たして正太郎は、そのどちらかであるかなどと考えあぐねて自らを悲観するような“タマ”ではない。だがしかし、

（これはちよつと、ありえないだろう……）

ぼやいてしまうのも仕方がない。

だが、そんな程度でこの場面が終わるはずもない。なぜなら……

彼が、ぶつかってしまった愛車を軽くバックさせ、助手席に乗せたとんでもないお姫様に対して煮えくり返るものを抑えつつ、なにか言い訳を考えようとした瞬間、

「あ？ ああ？」

思わず、目の前に繰り広げられた光景に声をあげてしまったのである。

正太郎の愛車がぶつかつたパトロールカーの後部座席のドアは、

ぶつかった衝撃でドアのロックが外れ、ぐらりとした勢いで開いてしまった。すると後部座席のシートから、なにやら大きな物が二つ、どさりと……と、落ちてきたのである。

2 検問 その7

2 検問 その7

マリオネット……？

彼の頭の中に第一に思い浮かんだ言葉がそれだった。

なにせ、こんな夜中には人通りなど皆無に等しい場所なのだ。街灯の明かりでさえ薄っすら照らされているだけだ。彼らの目に映しこんでくる情報など、たかが知れている。しかし……

(ば、ばかな……、そんなはずは……)

正太郎はぶるりと、全身に身の毛がよだつものを感じた。眼前に見ゆるもの。それは、濃紺の上下を身に纏い、お馴染みのマークが印してある制帽が転げ落ち、腰には拳銃と警棒と、そして重厚なベルトが巻かれている。大人の体だ。二人の警察官の体だ。

だが、なにか普通と様子が違う。なにやら様子が違う。

(事故を起こした余韻からではない)

彼は咄嗟にそう感じた。

そのだりとした風体ふうていの二体の体躯は、泥酔し、まるで繁華街の道端にだれかれ気にすることなく転がっている若者のように力なく突っ伏している。いや、別の言葉で言うのなら、それはまるで糸の切れた、もう用済みの、ゴミくず同然の操り人形のごとく身を守る事を知らない動作で曲がりくねっている。

赤々とした回転灯がコマ送りのスクリーンのように二体を照らし出している。

正太郎の喉が、ゴクリと地響きのような音を鳴らした。手の震えが止まらない。まるで休火山のマグマが地底の奥底から眠り目覚めてくるような負の衝動を感じる。

違和感……

そつだ。違和感だ……。

暗がりの中、二体の警察官の様相に止め処ない違和感を覚える。人間の体を構成するのは、その中心部にある胴と四肢……。腕、足、胴体。しかし……

(なにか足りない……)

本能的に感じた。正太郎は、眼前に広がる光景を、紛うかたなき凄惨で無残な屍しかばねである、と感じとっていた。無論、彼の幾度となく何度となく人間の死というものを体感してきた蓄積が、そう感じさせているのだ。

しかし……

(なんだって、こんなところに……)

いくら羽間正太郎が、百戦錬磨の殺人者とはいえ、虚きよを衝かれれば啞然とする。なにしろ彼は、警察の検問であると信じきっていたのだから。警察の検問以外の何物でもない疑いをかけていなかったのだから。

そしてもう一つ。彼が虚を衝かれた理由に、もっとも重要な部分がある。それは……

二体の屍には、人間の体を構成する一つめの部分がない……と、覚さとつたからだ。もっとも重要な部分……頭部が見当たらなかったからだ。

(なんなんだ！ どういうことなんだ、これは……！)

当然の如く、辺りは血の海に染まっている。パトロールカーの後部座席から、ドアから、そして二体の体躯が崩れ落ちたアスファルトの面から、赤黒く、そして鮮やかな液体がその場面を埋め尽くしている。煌々とした赤色の光がそれを照らし映すたび、その光景の悲惨さを、より凄惨に映し出している。目の前の屍の首の部分マジマジと見ゆると、肉と骨を切り裂いたあとのぬめりとした部分から、未だいまドクドクとした体液が噴き出し続けている。なにゆえ、ここまで残忍さに至らしめるものぞ。

このとき、正太郎はふと我に返った。

「美咲ちゃん！ 見るな！ 見てはダメだ！」

あらゆる死の光景を見てきた正太郎でさえ、血も凍るような凄惨な光景だった。なれば、こんな場面を無垢な女子高生に見せるわけなどいかに。

正太郎は、自らの左腕にしがみつき悲痛な叫びで何かを訴えかけてきていた少女を強く守らねばいけぬ……と光速の勢いで悟った。だから、音速以上の勢いで美咲の体をゆすり上げ、美咲の意識を目の前の悲惨な光景から逸そらそうとした。

しかし……。

「美咲ちゃん！ 美咲ちゃん……！」

少女の体を強く揺すったが、うんともすんとも反応がない。この少女も、まるで出会った頃に感じていた美少女人形のように、木偶でくと化している。

と、その時、彼は、その少女の肩を揺さぶった時に、なにやら自らの手に、妙な違和感を覚えた。ぬるぬるとした違和感。これぞとない違和感……。

正太郎は、おのれの全身からざっと血の引いてゆくのを感じた。そして、これまでに味わった事のない焦りを感じた。

（血だ、これは……まぎれもない、これは血だ……）

彼の手のひらに伝わってくるもの。それは目の前にいる少女の……彼が自宅まで送り届けることを約束した少女の、紛れもない赤々とした生温かい血液の流れだった。

2 検問 その7（後書き）

Q、小熊を連れたサーカス団が、ハイウェイパトロールのお巡りさんにカルピスの差し入れをせがまれている。君はそれを見て、どうしても消費税が払えない。さあ、どうやって断る？

A、「感動した」

2 検問 その8

2 検問 その8

その血液は、未だ容赦なく流れ出し続けている。どくどくと、どくどくと……。それはまるで、子供のころ浜辺の波打ち際で砂遊びをした時に感じた、砂城の崩壊によく似ていた。

一度崩れ始めたら止まらない。もう二度ともとに戻る事のできない崩壊の始まり。決壊。夏の海での砂の城の思い出。

ようやく形になり出した砂の城は、いたずらに寄せてはかえす波の強弱によって容赦ない攻撃を受け、そして土台から手につかむことの出来ぬ土砂と成り変り、息をのむ間もなく崩壊し始める。白い砂。白いキラキラとした砂。泡交じりの運命にも似た汚れた海水に翻弄される珠玉のような白き毒薬。

その儂い記憶がたった今、彼の両の手に抱かれた少女の体と連鎖反応を起こしている。この成熟を待ちきれない少女の体を通して連鎖反応を引き起こしている。

正太郎の逞しい体に、もたれかかるようにして崩れる美咲。その儂く美しき容姿の土台には、海水にその形成を泥のように溶かされてゆく赤々とした血液の流れが受けて取れる。

(なぜなんだ、どういうことなんだ !?)

彼の記憶と、黒いイメージとが交差しあう。怒り。悲しみ。憎しみ。驕り。

幼いときから得ていた殺人者としての血の色は、よもや私の自制心によって支えられていた。しかし……

永遠に混ぜ合わさる事のない毒薬は、彼の衝動を限りなく黒の方へと導いてゆく

見れば、うつむいてのたれかかる美咲の背中に、ギンギンと不気味に光り煌めく刀剣のようなものが突き立てられている。長い、細長い、刃こぼれなど微塵も感じさせぬような真剣が、一縷の迷いもなく突き立てられている。その刀剣は、天井の合成シートの幌を見事貫通し、美咲の背中まで及んでいる。

美咲はピクリとも動かない。ただ、ただ、彼女のやわらかな匂いと体温を感じさせながら、今までそこにあった正太郎の記憶に、あの清純にして無垢な赤子の小動物のように汚れなき香りを、これぞとない柔和な感情を、叩きつけてくる。

害人間は死なない

美咲はそう言っていた。果たしてそうなのだろうか？ 本当のことなのだろうか？

羽間さんは何も知らない、何も知らない。いい人過ぎるの

彼女は最前からそう言っていた。汚れなき心を前面に押し出して、一筋の、珠玉の涙を落としてつつ、何かを訴えかけるように、さもなだめかけるように言い続けていた。俺はその心にきちんと応えていたのだろうか？ 誠心誠意応えてあげようとしていたのだろうか？ いや、それよりも……この状況は？ この血の惨劇の意味は？ 美咲ちゃんが刺されなければならぬ理由は？

彼の“棋譜”は、よもや一瞬にして蜘蛛の巣のごとく張り巡らされた。冷静。沈着。そして

憎悪……。

ことごとく抑えられていた自制心が崩壊し始めた時である。八年前に起きた事件。その時に匹敵するような憎悪の類いが、彼の肉体を席卷し始めた時である。

殺す

彼の脳裏に、それ以外の単語が見当たらない。それは正太郎に對を成すものに対しての地獄を意味する始まりでもあった。

美咲に突き立てられた刀剣が、瞬く間に抜かれ、彼女の背中から弾けるような血しぶきが飛ぶ。そしてまた刀剣の怒り狂った攻撃の

雨霰のように振り込もうとした、そのとき

正太郎は瞬時にギアをバックに入れ、急激にクラッチをつなげ、アクセルを思い切り踏み込んだ。

凄まじい後輪の回転が獣の雄叫びにも似た高音を轟かす。同時に彼の車は残像を空气中に映し描きながらスピリンし、一回転する。

2 検問 その9

2 検問 その9

正太郎は少女を強く抱きかかえたまま、ドアロックを外し、そのまま肩で体当たりしながら愛車のドアを突き破った。スピンしたままの車から投げ出される格好で二人の体が路面へと叩きつけられる。彼の愛車は、地響きと、狂気の雄叫びを上げたまま、瞬く間の勢いで路肩部分に停めてあったパトロールカーの二台の並びへと突っ込んでいった。

正太郎は、肩甲骨の筋肉のやや厚めの部分から着地した。アスファルトの路面とデニムの擦れる荒削りな音が、バリバリと彼の右耳の辺りをつんざいた。スピンした車からいきなりダイブした勢いで、この世の物と思えぬほどの衝撃を感じたが、顎を引き、首から上を守るような姿勢で転がり果せたお陰で、気を失うほどの痛みは全身には走らなかつた。だが、少し前に、悠里から贈られたばかりの深緑色のテーラードのジャケットの背中の部分に大きな穴が開いてしまったことが、少なからず心痛む。

いや、彼の痛みはそれだけではない。

胸の内に抱きかかえ、ピクリともその動作を再開せぬ少女の温もりが、彼の胸を打つのだ。この少女の血の混ざった涙の一滴が、彼の胸を焦がすのだ。この少女の……、この守らなくてはならぬ少女の悲痛な叫び いや、純真な痛みを理解してあげられなかったことが、本当の意味での彼自身の痛みそのものなのだ。

美咲は、この動転の最中でも、眉一つ動かす事はなかつた。彼女の小さな体に腕を回し、あらゆる衝撃からさえも守ろうとする正太郎の腕は、傷だらけ、擦り傷まみれ、赤く、黒々とした液体にまみ

れていた。血に染まっていた。

しかし、それがなんなのだ。その程度の痛みがなんなのだ。彼女の痛みはそれをも遙かに凌駕するほどの痛みなのだ。と、胸の中を締め付ける。胸の内を焼き尽くす。

守る事が遅かったのか。守る事に、それほど愚鈍だったのか

正太郎は今知った。彼女の悲痛な叫びが何であるのかを。何であつたのかを……。

（理由なんてどうだっていい。この俺の……いや、彼女の異能の意味なんてどうだっていい……。 “害人間”の意味を知ろうが知るまいが、俺の立場がどうなつてしまおうが 手を突き出して助けを求めてくる者を守ってやれなかつたことが愚かな行動だったんだ。それなのに……。これで何度目なんだ、羽間正太郎。これで何人目なんだ、羽間正太郎……。人の気持ちを無下にして、誰が何を守ってやれる、誰が何を救ってやれるっていうんだ。目の前にいる者の気持ちを邪険にしてしまったのは俺の罪……。俺は、その罪を背負つてここまで生きてきたつもりだ。だからこれだけのことをやってきたつもりだ。だが、俺は……。俺は……）

正太郎は、この窮地の最中でも、自省という数千本の刃の責め苦に苛さいまれていた。それは彼の生い立ち、そして、生まれ持った異能の重圧そのものに由縁を発していた。

3 異能 その1

3 異能 その1

羽間正太郎の人生は、一事が万事、すべてに於いて幸せに満ち足りた生活ではなかった。

物心ついた頃が一番古い記憶は、優しい母の手に連れられ、新しい苗字の家に移り住んだというものである。この横浜の地に定住することになったときには、“谷村正太郎”と名を変えて、一人の年齢の離れた兄と、厳しい父親のもとで育てられたのが彼の記憶のページ目である。母が、この横浜の地で流通業を営む“谷村梅之助”と再婚したのである。

正太郎は幼い頃、体が弱く、よく風邪をひいた。だが、人を雇い、流通で家系を支える一家総出の所帯では有無を言わされず、広い家に独り、冷たい布団の中で病魔の狂った熱に冒され続けながら、柱時計のコツコツとした単調な時を刻む音を耳に植えつけつつ、振るえる指先と、背筋からくるなんともいえぬ虚空の悪寒を感じ続けているしかなかった。それでも歯を食いしばり、耐えるしかなかった。そんな孤独な場面でも、彼は、

（おしごとなんだからしょうがないよね……）

と、子供ながらに枕の角の部分をかきむしりながら心に言い聞かせ続けていた。

そんな正太郎少年でも、小学校に上がるころになると、竹が青々と伸びるが如くみるみる体が丈夫になってゆき、やがては近所でも快活で負けん気の強い少年として名を馳せるようになっていった。

天性とも言うべき少年特有のみずみずしさが彼の持ち味であり、つやのある黒々とした髪と、天使を思わすような愛らしい笑顔が特徴的な男の子であった。それは彼が、誰彼ともなく可愛がられる素質が開花したところであろう。

話す言葉も、子供には似合わずどこか理知的で、それがいやみたらしくない。毎週、毎日のごとく友人達の家を誘われ、夕食をご馳走になるほどの人気振り。自宅には、両親ともども、兄でさえ帰宅していることがほとんど有り得ない状態であったが、それゆえに、正太郎の“およばれ”される回数も拍車をかけてゆく。

兄良彦は、歳の離れた弟をそれなりに可愛がってくれてはいたが、なにぶん歳の離れているせいか、それともどこか血の繋がらない何かを憂いてか、どこかそっけなく、高校生になった辺りから会話も持たぬようになっていった。それでも小学生の低学年の時期は、友人と会話も、遊びも人並み以上のバイタリテイで乗り切っていた。

事実、それが幸せに満ち足りているか、そうであるか否かは、受け取られる者によって感じ方は変わってくるのだが、そういった“体質”を形成していった成り行きは、この状況から鑑みても否めないものがある。

そんな正太郎少年に、ある転機が訪れた。これが、後に終生苦悶と波乱に満ち溢れた生涯を決定づける大事件になっていったことは、間違いない。

3 異能 その2

3 異能 その2

それは、彼がまだ小学三年生のときの話である。

正太郎少年は、その快活さと、学業の成績が底知れず好成绩であったこともあり、その選考会が催される都度、クラス委員に抜擢されるが多かった。

弁術も子供ながらに巧みで、男女問わず活発な友人関係を築き上げていった。

また、それは世代的な魔術であろうか、そのころは学校全体の生徒数も爆発的に増えていた。一クラスに五十人という、まさに「机が壁にめり込んでしまうのではないか」といったほどの勢いで、その教えから、生徒の人数まで詰め込まれていた時代である。学年編成でさえも十クラスは裕にあつた。それが六学年分あるのだから、二酸化炭素の排出密度もかなりのものであつたといえよう。

そんな鬱蒼とした工業プラントのような 　いいえて妙だが
まるで工事現場のタコ部屋か、それとも鎖でつながれた奴隷船の船底のような、息の詰まる状態の教室であつても、彼はひとりひとりの名前と特徴を覚え、それらの行動を逐一読み取り、クラスから一人としてあぶれる者がいないようにと、日夜、気を遣う努力をしていた。

そんな折、秋の大運動会を終え、赤とんぼが校庭の隅々を遊覧して廻り、西の空もあつと言う間に赤く染まってしまったと感ずる頃のことである。

居残りの掃除当番終え、とりあえず帰宅しようとしてランドセルに教科書の類いをしまおうとすると、一人の少女が声も絶え絶えしく、

すまなそうに呼びかけてくるのである。

「たにむらくん……」

少女は、そつと足音も立てず、付かず離れずの間隔を守り、正太郎少年の背後の辺りへと近づいてきた。ふわりとした石罅のよい香りが漂う。

正太郎のその頃の名は、先述の通り“谷村正太郎”である。だから回りからの呼ばれ方は、“たにむらくん”か、“しょうちゃん”または、“しょうたろうくん”である事が多い。

少し本題から逸れるが、“羽間”^{はねま}という姓は、正太郎の母鈴子の姓であり、彼の生みの親の父方の姓ではない。

と、まあ、それはさておき、正太郎少年は、クラスの中でもあまり目立たず、余程影の薄い君塚弥生^{きみづかやよい}が、こんな時間に声を掛け、てくる事が、あまりにも意外でたまらなかった。

「どうしたの？ きみづかさん」

「うん、ちよつと、ちよつとね……。ちよつとたにむらくんと少しお話してみたかっただけなの。でも、なんでもない。顔を合わせたら、なにをしゃべるかわすれちゃったみたい。ほんとごめんね、ごめんね、たにむらくん。いつもたにむらくんはいそがしいよね。

先生のお手伝いとか、たいへんよね。ほんとうにごくろつさま……」
「そんなことをわざわざいいに来たの？ ちよつとへんだよ、きみづかさん。なにかあったならえんりよしないで言つてよ。とりあえずぼくにできることがあったら、なんでもするからさ。もしかして、クラスのだれかにいじめられているとか？」

「ううん……、そんなんじゃないの」

「だつたら……」

「いいの、ごめんね」

少女はそういって、上履きのゴム底を勢いよく鳴らし、教室を去って行った。

君塚弥生は、目がパチクリとして、黒目がちで、色白で、出しやばる事をしたことがない、非常におとなしい少女だった。まるで精

巧に作り上げられた日本人形のように無表情なのが彼女のトレードマークだった。成績は中の上程度。母子家庭で二人暮らし。運動はかなり苦手な方で、少し病弱で、木陰で体育すわりをしながら見学する姿を見ることも珍しくはなかった。

正太郎少年としても、そんな彼女が、まさかほとんどの生徒が帰ってしまったこんな時間に、向こうから話し掛けてくるだなどと思外でしかたなく、これぞまさに、秋の夕暮れの珍事としか言いようがない状態であった。

それでも彼は、いつだったかの彼女と言葉を交わした事を思い出さずにはいられなかった。

君塚弥生はきれい好きで、その艶のある厚ぼったい黒髪も、毎日欠かさずきちんと三つ編みに結び上げてある。正太郎は、その地味ながら誇らしげに束ねられた黒髪を見て、つい、声をかけたことがある。すると少女は嬉しそうに、

「おかあさんに毎朝編んでもらっているの……。たにむらくん、ありがとう」

そう返されたのだ。

子供のわりに、大人顔負けの社交上手な正太郎少年ではあったが、彼女の言葉尻につけた、

「ありがとう」

というその意味が　多分子供だったせいか　その時点は分からず仕舞いであった。

しかし、なにか、どこか嬉しいものを感じていた。本当に口数の少ない女の子であると呆れさえもしたが、それでもなにか、やんわりと心に伝わってくる清々しいものに、幼き正太郎少年の胸は妙にそわそわした温かいものを育まざるを得なかった。

（でも……、あまり話しかけても答えがかえってこないきみづかさんが、いったいなんの用事だったんだろ？）

言葉少なく、他の友達とも話さえてしているとところを見たことがない、そんな君塚弥生が、あらたまって話し掛けてくる。この千年

に一度きりしかないであろう珍事に、正太郎少年は、いつしか胸騒ぎを覚えるようになっていた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4624d/>

憤悶のアリアドネ

2008年9月3日07時30分発行